



東北大学 史料館 だより

No.16
2012 Mar.

TOHOKU UNIVERSITY ARCHIVES NEWSLETTER



Index

- 2 「髭の写真」
—仙台医学専門学校留学期の魯迅の
写真について— 渡辺 襄
- 4 魯迅記念展示室のオープ
ニングがおこなわれました
- 5 企画展記録
・探してみよう東北大学のアーカイブズ
・清風一過—大島正隆の歴史学と民俗学
- 6 資料の公開について
- 7 史料館のうごき
- 8 お知らせ

史料館所蔵の公文書中にみえる、
宮城県沖地震の記録
写真：理学部および工学部での被
災状況
資料：理学部および科学計測研究
所での対応記録

東北大学の災害復興記録とアーカイブズ

災害を記録しこれを伝えていくこと。その重要性に異を唱える人はいないでしょうが、現実にはうまく伝えられていないことも少なくありません。

本学でも創立以来様々な災害に遭遇してきました。しかし残念なことに、そうした災害に際して東北大学がどのような対応をしたか、という災害対応記録が詳細な形で残されている事例は、本学でもあまり多くないようです。38年前の宮城県沖地震に際しては、全学的な対応委員会が作られたことが記録に残されていますが、その委員会でのどのような審議がおこなわれ、どのような結論が出されたのか、という情報を提供してくれる資料は、少なくとも現在判明する限りでは、公文書としても、さらには私的な寄贈資料としても、史料館にはあまり残っていないのが現実です。

様々な災害対応に忙殺される中、記録の作成は、ややもすれば後回しにされがちです。しかしそれが貴重な歴史資料、そして来るべき未来の災害に備えた情報資源であることを考えるならば、やはりどこかで意識して取り組まなければならない課題でもあります。

「髭の写真」

—仙台医学専門学校留学時代の魯迅の写真について—

日中友好協会宮城県連 事務局長 渡辺 襄



「仙台における魯迅の記録を調べる会」(以下、調べる会。1973年9月発足)が発掘し、収集した魯迅に関連する資料のなかに、仙台医学専門学校(以下、医専)に留学した1904年9月から06年3月の1年7カ月の間に魯迅の写真が6葉あることを確認した。そのうち「髭の写真」と「敷波重次郎教授ドイツ留学記念写真」は、同級生の遺族から東北大学史料館に寄贈され、公開されている。そのうち「髭の写真」について解説を試みた。魯迅の本名は周樹人だが、ここでは魯迅を用いる。

「髭の写真」とは、魯迅と同宿生たち5名との集合写真、1905年9月頃、仙台市小川写真館撮影。写っているのは、前列左から、施霖、吉田林十郎、磯部浩策、福井勝太郎、後列左から魯迅、大家武夫。提供者は、下宿の主人、宮川信哉の遺族。調べる会の発足3か月後のことで、「髭の写真」と称されるようになった。

下宿の主人、宮川信哉が1913年に、施霖、吉田以外の4名に口髭を墨でかき、裏側に撮影年と全員の姓と消息を書き残した。右上に「明治参拾八年 月影」(月の前は空白)、左下に上段に「拾年後想像髪」(髪は髭の誤り)、下段に「大正二年現在 大家君米国 周君不明 三宅君大学小児科 磯部君米沢 吉田君朝鮮 施君不明」と筆写した。

大家武夫とは魯迅の同級生、保証人は藤野先生であった。大家は魯迅から自筆のサインと撮影時期の書き込みがある弘文学院の卒業記念写真を贈られていることで既に知られていた。大家の娘にあたる大本百合子はその写真を公表した。その裏書きは、「大家君恵存 周樹人持贈 癸卯春日写于日本之東京 即明治三十六年也」とペン字で縦書きされている。

周樹人つまり魯迅が最初の下宿から次の下宿に転居したことは作品「藤野先生」に書かれている。しかし、作品ではいつ、どこへ転居したかなど具体的には何も書かれていない。それが確定できたのは、仙台留学1か月余に魯迅が中国の友人蔣抑卮にあてた手紙が公表されたからである。新暦の10月8日付の手紙で、「今、土樋に引っ越そうかと思っています」と予告し、追伸で「日本陸前国仙台市土樋154番地、宮川方」(158番地が正確)と住所を書き加えていた。手紙には最初の下宿に対する不満を書きつらね、土樋の下宿は「いいというわけでもなく、学校に近く、あたふたせずに済むというだけ」とたいした期待感をもっていない。

三宅君は宮川の記憶違いで三谷勝太郎のことである。医専入学後まもなく改姓願(1904年11月15日付)を出して福井姓に原籍復帰した。魯迅と同級生中の最年長者、保証人は藤野先生。三谷を三宅とまちがえたのは、改姓前すでに宮川宅に下宿していたことをうかがわせる。医専を卒業して1909年から14年暮頃まで、東京帝国大学医科大学小児科教室に勤務した。上京後の住所は東京市本郷区西片町に之部19号であった。同じ頃、魯迅は夏目漱石の旧居から西片町は之19号に転居していたから、かつての同級生どうしはそう遠くないところに住んでいたことになる。これらは、東北医学会会報第55号「特別会員人名録」と東京大学医学部小児科教室同窓会氏名録によって確認できた。

磯部浩策は3年生、保証人は藤野先生であった。大正2年、1913年4月に山形仲藝、内田守一両博士在職25年記念会が仙台で開かれたとき、それに参加するため磯部が仙台に来て、かねて親交のあった宮川と思い出を話しあい、宮川が興に乗じて写真に髭をかきこんだのであろう。

吉田林十郎は明治38年9月、医専の新生、東北大学医学部同窓会名簿に1911年(明治44年)卒業生の欄

にある「武者林十郎」と同一人物と考えられる。1913年（大正2年）の時点で朝鮮在住というのが詳しい事はわかっていない。

医専「生徒名簿」(1906年1月作成)の記載から、土樋の下宿はすでに海老名に代替わりしていた。海老名方の下宿生は、そのほか魯迅（周樹人）と1年生の池澤永一であった。池澤は「髭の写真」に写っていない、おそらく写真の撮影時点では海老名方に下宿が決まっていなかったのかもしれない。

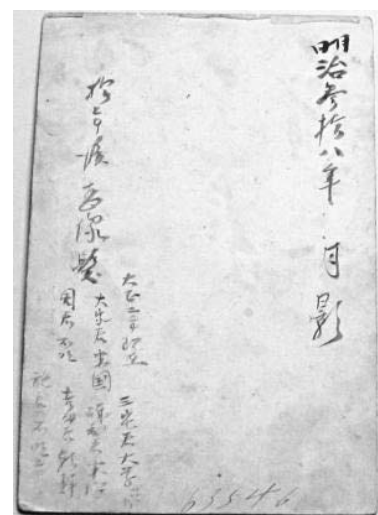
魯迅、池澤、吉田の住所欄に記載されている下宿先は順に海老名、海老名カツ、海老名新治郎とある。仙台市内の海老名姓の方々に電話取材して、孫にあたる海老名巖を探すことができた。戸籍謄本と古い写真をみせていただき、可乃（かの）と新治郎は祖母と孫の関係と分かった。生徒名簿のカツは可乃の書き間違いであった。

施霖は1904（明治37）年9月、第二高等学校第2部工科に入学した中国人留学生。調べる会の調査によって、その存在があきらかにされた。浙江省仁和县出身、正則学校などを経て二高に入学するも、2年続けて進級試験に合格できず、1906（明治39）年除籍処分になった。最近、阿部兼也東北大学名誉教授によって、二高除籍後に大阪高等予備校、翌年大阪高等工業学校（現、大阪大学工学部）に入学、1910（明治44）年卒業したことがあきらかになった。

河北新報から、施霖と魯迅の下宿先が決まる前、二人が田中リウ方に止宿中との記事が見つかったし、おそらく仙台で撮影した二人が並んだ写真も大型写真集『魯迅』（北京魯迅博物館編、2008年、河南文芸出版社）に掲載されている。留学先は違っても下宿などはずっと一緒だったはずだが、魯迅の手紙や作品などに一度も登場したことがない人物である。施霖にも魯迅に関する回想などはないらしい。

魯迅が片平から土樋へ下宿替えるにあたって、藤野先生が関わったことはあきらかである。魯迅は作品「藤野先生」では「ある先生」とぼかしたが、藤野先生自身は魯迅の死後、同級生の小林茂雄あての返信に教学だけでなく、「下宿屋生活之仕方」など「出来るだけ便宜を斗って上げました」と書いている。魯迅も医専中退までずっと宮川方の下宿生として住み続けたのである。

「髭の写真」から、医専初の中国人留学生、魯迅を藤野先生・医専生・下宿の主人が暖かい交流をした雰囲気醸し出されている。



「髭の写真」表（上）と裏面（下）

魯迅記念展示室のオープニング行事がおこなわれました

●常設展「魯迅と東北大学」

前号でもお知らせしたとおり、近代中国を代表する作家・魯迅の仙台医学専門学校留学時代の資料を中心に本学所蔵の魯迅及び留学生関係資料を展示紹介する「魯迅記念展示室」が7月19日より一般公開を開始しています。展示室では、魯迅こと周樹人が南洋官費留学生として東京に来日しやがて仙台医学専門学校へと進学してからの、学生生活や友人との交流、藤野巖九郎教授との出会い、そして文学の道を決心して仙台を離れるまで、さらには作家魯迅として名を為してからの仙台や日本とのつながりを示す様々な関連資料を展示紹介しています。同時に、東北大学へのかつての留学生たちについてもとりあげ、明治末期以来の仙台における留学生たちの足跡を紹介しています。7月19日の一般公開開始以来すでに2,300人以上の方にご見学いただいております。



●オープニングセレモニーと講演会

去る9月28日（水）に、この魯迅記念展示室の開設記念行事として、程栄華駐日中国大使をはじめ多数の来賓出席のもとオープニングセレモニーがおこなわれました。当日は程大使らによるテープカットセレモニーに先がけ、エクステンション教育研究棟2階講義室にて記念講演会も開催され、汪婉（中国社会科学院近代史研究所研究員・駐日中国大使夫人）の「近代日中教育交流史における「日本留学と日本遊歴」、および末松和子（本学経済学研究科准教授）「経済学研究科における中国人留学生への教育支援－東日本大震災を乗り越えて－」の二つの講演がおこなわれました。この講演会は教職員・学生のほか市民にも公開され、66名の参加者があり、講演後には活発な質疑応答も行われ、国際交流の歴史と現在に対する関心の高さがうかがわれました。



●ミニ企画展「学都仙台の留学たち—戦前期東北大学の日中交流—」

このオープニングセレモニーにあわせ、魯迅記念展示室開設記念のミニ企画展「学都仙台の留学たち—戦前期東北大学の日中交流—」を9月5日から10月2日まで開催しました。展示では、中国現代数学の開拓者として著名な陳建功・蘇歩青、魯迅に続く世代の文学者「陶晶孫」として知られ、東北帝大留学中には東北帝大交響楽団の常任指揮者としても活躍した医学者・陶熾など常設展でも紹介している留学生に加え、中国における化学名詞の統一に尽力した化学者・鄭貞文、遼寧省出身で戦後台湾を代表する地質学者として活躍した馬廷英、台湾出身留学生として東北帝大に学び、左翼運動に身を投じながら卒業、北京大学などで化学者として活躍した蘇子衡など、東アジアをまたにかけて活躍したかつての留学生について紹介をおこないました。



辛亥革命で帰国した留学生の復校願

なお魯迅記念展示室については、下記ホームページでも情報を公開しています。

<http://www2.archives.tohoku.ac.jp/luxun>（永田）。

企画展を開催しました

●探してみよう！東北大学のアーカイブズ

(10/8～11/11 企画展示室)

平成23年10月8日（土）から11月11日（金）まで、「探してみよう！東北大学のアーカイブズ」展を開催しました。

当館の大学アーカイブズとしての活動は、古くは1963年の東北大学記念資料室発足にはじまり、歴史公文書の移管制度についても2000年12月の東北大学史料館への転換以後取り組んできている課題ですが、本年四月から公文書管理法が施行されたことにともない、さらなる展開をとげつつあります。展示ではこうした(1)東北大学史料館のアーカイブズとしての様々な取り組みと、(2)それに伴い集積されたアーカイブズのエッセンスを簡潔に紹介しました。

(2)のアーカイブズ紹介ではさらに①「アーカイブズにみるあのひと、このひと」と「アーカイブズに見る東北大学の災害対応と復興」という二つのコーナーを設け、前者では、見学者が比較的身近に感じられる資料として『芳名録』に記された著名人の署名や、創立期の教官が海外留学などにさいしてやりとりした「絵はがき」をとりあげました。前者は公文書の事例として、その中に認められたアインシュタインや津田左右吉、湯川秀樹、柳田国男といった著名人たちの肉筆署名を、後者では個人文書に含まれる絵はがきからうかがえる学者たちの交友関係をそれぞれ紹介しました。また後者では、東日本大震災に際してのアーカイブズの役割という課題を意識し、過去の大学の災害対応記録を①関東大震災、②戦災と復興、③宮城県沖地震という三つのテーマに分けて紹介することで、過去の対応記録等を保存・公開しこれを提供するという役割をアーカイブズが負っていることを紹介しました。展示開催期間中の見学者は1013名。期間中に「片平まつり2011」(10/7, 8)が開催され、多くの方に、「大学アーカイブズ」の役割や存在意義等を知っていただくことができたのではないかと思います。なおこの展示の一部は、企画展開催後も常設展示の一部として継続していく予定です（永田）。



●清風一過—大島正隆の歴史学と民俗学—

2011/9/27～10/3 附属図書館エントランスホール

大島正隆（1909～1944）は、若くして亡くなった日本中世史の研究者です。第二高等学校学生時代に学生運動に身を投じ投獄され退学しましたが、27歳で東北帝国大学法文学部に入学し、卒業後も研究活動を続け、東北地方に関する先駆的成果を残しました。

史料館ではすでに2010年9月時点で、所蔵する文書や遺品など300点強のデータをホームページで公開し、11月には一部を「新公開資料展」で紹介しましたが、その後100点近くの関連史料が、新たに遺族などから寄贈されたため、整理を担当した学内外の教員たち（＝大島正隆文書研究会）が中心となって、企画展示を開催いたしました。会場は東北大学附属図書館の一角をお借りし、史料館と大島文書研究会の共同主催、共催として図書館および東北史学会、東北大学文学研究科日本史研究室にも加わって頂きました。

展示は、(1)第二高等学校時代、(2)東北帝国大学時代、(3)東北中世史研究、(4)晩年と再評価の動き、という4部で編成し、大島の34年の生涯にそって、活発な現地調査や研究活動を示す資料を配置しました。特に、新たに寄贈された大島自身の書簡を多く展示することが出来ました。また、没後の再評価の動きを通じて、現在まで受け継がれる大島の情熱が感じられる展示になったのではないかと思います（曾根原）。



資料の公開について

史料館では、公開準備が完了した資料の目録を順次ホームページ上で公開しています。これらの資料目録は、当館ホームページ（<http://www2.archives.tohoku.ac.jp/>）より入手することができます。以下、平成23年9月以降24年3月までに公開される予定の資料（約1,000点）のなかから、特に注目されるいくつかの資料群をご紹介します。

●特定歴史公文書（当館に移管された法人文書）

総務部総務課移管文書：『東北大学百年史』編纂事業の終了に伴い平成20年度末に移管。

・勤労働員に関する教官の意見

アジア・太平洋戦争末期の昭和19年8月頃に、総長名で各教授たちに出された、学徒勤労働員や戦時研究体制など戦時下における大学運営に関するアンケートへの回答綴。戦時下の教授たちの大学観がうかがえる貴重な資料。

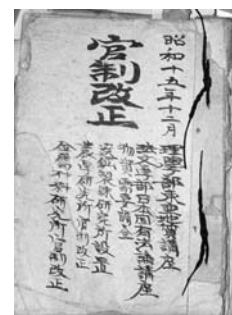


・イールズ事件関係文書

昭和25年5月、大学からの共産主義思想追放を趣旨とするGHQ民間情報教育局教育顧問イールズの講演に際し反対学生たちが講演を妨害したとして逮捕検束され、戦後日本の大学自治・学問の自由を問いかける事件として大きな社会的反響を呼んだ事件。事件の経緯や学内における検討資料、関係写真など、事件の詳細を伝える記録。

・官制改正関係

帝国大学時代において、学科・講座等の整備に際し本学の組織を定める「東北帝国大学官制」を改正するために文部省に上申した文書。本学の組織変遷を整理する上での基礎資料の一つ。



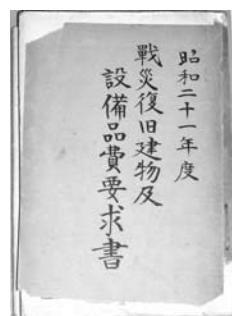
・大学問題関係資料

昭和43年から44年にかけて全国で発生した大学紛争への諸大学の対応をまとめた調査資料。東北大学での対応の検討のために収集した資料。

財務部財務課移管文書：2009年度に財務部財務課（主計担当）より移管

・概算要求関係文書

創立期以来の各年度における東北大学の概算要求資料。学部・学科や研究所の増設、厚生施設の整備、特別事業の要求など、時代時代における課題や構想を伺うことができる重要資料。



・戦災復旧緊急整備関係文書

終戦直後の大学の復旧整備に係る予算要求に関する文書。戦時下における本学の被災状況や復旧の課題などをうかがわせる。

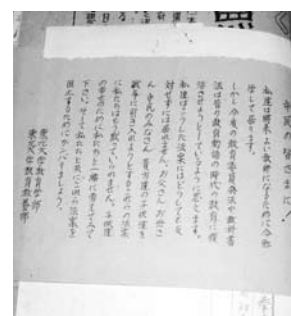
学生部移管文書（第二次公開）：1994年度に学生部学生課（当時）より移管された文書の一部。

・学校農園関係文書

終戦直後の食糧不足に対応するために各学校単位で臨時に設置された学校農園の運営に関する書類。

・学生運動関係資料

昭和20年代～30年代初頭における東北大学における学生運動に関するビラ・チラシその他各種の資料や情報を収集編さんしたもの。当時の状況を克明に知ることが出来る。



史料館のうごき

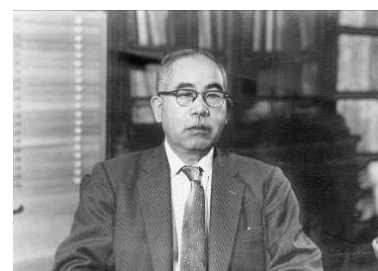
◇コレクション紹介展No.2 岡田三郎助画「山形仲藝博士寿像」(11/18-12/23)

コレクション展示のシリーズ「学者の肖像」。第2弾は、明治中期から永く仙台医学専門学校長などをつとめ東北帝国大学医科大学創設時に初代医科大学長となった医学者・山形仲藝（1854-1922）の肖像画。描いたのは、明治後期から昭和初期の日本画壇を代表する洋画家・岡田三郎助。山形の在職25周年を記念して制作され、本人に寄贈されたものです。2003年に遺族から本学に寄贈されました。



◇新公開資料速報展 No.12 本川弘一史料—ダイナマイトにも負けない学長—(1/17-2/20)

戦前—戦後期の日本の脳波研究の牽引車で、本学学長となりながら在任中に急逝した生理学者・本川弘一の関係資料を展示しました。北杜夫が「教だけでなく育もする先生」と敬愛した本川教授の人となりをしのお資料として、学長時代を中心とした各種講演での原稿や、学者を志す前から修めている水彩画・水墨画の作品群を展示紹介しました。



◇当館所蔵真島利行関係資料が、日本化学会認定「化学遺産」に認定

9月23日～12月11日に国立科学博物館で開催された「化学者展—ニッポンの近代化学の夜明け—」に出陳された、本学理学部初代教授の一人で日本の有機化学研究の基礎を気づいた世界的化学者・真島利行（1874-1962）の関係資料が、このほど日本化学会による「化学遺産」に認定されることとなりました。理学部化学教室から当館に寄贈された真島教授の作成によるハイドロウルシオールサンプルや、東北帝大在任中から戦後に欠けての長期にわたる日記などが指定される見込みです。

◇当館所蔵 金山平三作「阿刀田令造先生像」が出陳されます。

当館が所蔵する旧制第二高等学校第10代校長・阿刀田令造の肖像が、兵庫県立美術館（4/7～5/20）で開催予定の「日本の印象派・金山平三」(仮題)展で展示される予定です。金山平三（1883～1964）は近代日本を代表する洋画家の一人で、本学とのかかわりでいえば、大正2年に本学に入学した日本初の女子学生の独り牧田らくを妻としたことも有名です。中央画壇で高い評価を受けながら、1935年の画壇変革を機に帝展を離脱してからは、实景に基づく風景画の製作に独り邁進した孤高の画家として知られています。肖像画は金山の作品の中では珍しいようですが、独特の味わいのある作品として評価を受けています。



◇川内萩ホールギャラリー展示「かわうち今昔ものがたり」

川内萩ホールの展示ギャラリーでは、このほど常設展示として「かわうち今昔ものがたり」を整備し、11月14日より一般公開をおこなっています。展示では、川内地区の自然や歴史について様々な資料や写真が紹介されています。特に注目なのは、川内キャンパス内でこれまで多数おこなわれてきた発掘調査によって出土した豊富な埋蔵文化財とともに、当館からも、川内地区が昭和32年に米軍から返還されてから本学のキャンパスとして整備されていく時期の整備計画図その他の関連資料を出展しています。火曜日を除く毎日、一般公開されていますので、是非一度のぞいてみてはいかがでしょうか？



東日本大震災における、本学各部局等の災害対応記録について (資料の保存および提供に関するお願い)

いわゆる東日本大震災の発端となった、昨年3月11日の東北地方太平洋沖地震から、早いものですでに1年が過ぎようとしています。この間本学に於いても、様々な形でこの震災への取り組みがおこなわれてきています。

今回の大震災にさいし、東北大学やそのなかの個々の部局・組織がどどのような問題を抱えこみ、それらに対してどのような検討をおこないどのような対処をおこなったのか。こうした、東北大学自身としての災害対応の記録は、東日本大震災における本学の経験を将来の東北大学にかかわる人びとに伝え、大学としての適切な備えを継続的に検討できるようにするうえで、きわめて重要な基礎となるものです。

当館では、こうした観点から、附属図書館ほか学内の関係機関と役割を分担しつつ、東日本大震災における**本学自身の災害対応記録**の保全・保存を進めていく所存です。

そこで、本学の教職員・学生、その他本学にかかわる方々に、下記をお願いいたします。

- (1) 東日本大震災における、各部局・学科・研究室等々本学の各組織での被災状況や対応を知ることが出来る**資料(情報)が紛失・消失しないよう、保全を図ってください。**
- (2) 部局等での災害対応に関する方針の検討・決定に関する記録は、本学の公文書として適正に管理する必要がありますので、必ず「**法人文書ファイル管理簿**」に登録してください。記録の方法は、紙媒体のファイルに限らず、CD・DVDなどに記録した電子データでもかまいません。このように公文書として管理することで、将来的に歴史公文書として史料館公文書室に移管し保存公開することが可能となります。
- (3) 公文書として登録したもの以外でも、本学各組織における被災状況や災害対応に関する記録として重要と思われる資料がある場合には、それぞれの組織で適切に管理保存するとともに、将来的にで結構ですので、**史料館への寄贈・移管をご検討下さい。**複製物をご提供いただく形でも結構です。

なお東北大学史料館は、東北大学防災科学研究拠点を中心とした東日本大震災デジタルアーカイブズプロジェクト「みちのく震録伝」への協力機関となっております。史料館に資料をご提供戴いた場合には、当館にてそれらをデジタルコンテンツとし、「みちのく震録伝」に提供していくこととなります。

お問い合わせはこちらへ

TEL : 022(217)5040 ・ FAX : 022(217)4998

MAIL : desk-tua@library.tohoku.ac.jp

東北大学史料館だより 第16号 2012年3月15日発行

編集・発行 東北大学学術資源研究公開センター史料館

〒980-8577 仙台市青葉区片平2-1-1 tel 022(217)5040

E-mail desk-tua@library.tohoku.ac.jp URL <http://www2.archives.tohoku.ac.jp/>